

日本銀行本店本館

〔東京都・日本橋〕

日本の建築界の父と言われる辰野金吾（1854年～1919年）。日本銀行本店本館は、東京駅と並ぶ彼の代表作であり、日本人建築家が設計した最初の国家的近代建築だ。

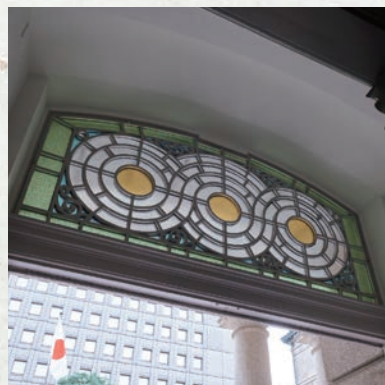
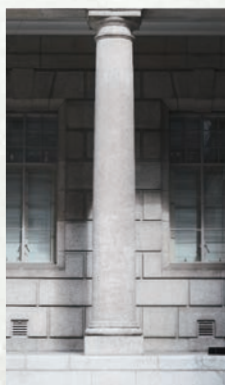
大正12年（1923年）に関東大震災に襲われ、火災がドーム屋根を溶かし、内部が類焼したものの、建物は崩壊することなく一日も休まず営業を続けた。その堅牢性は、西洋建築技術を日本の風土に根付かせる、という辰野金吾の建築哲学が起こした奇跡だったのかもしれない。



中庭を擁する正面玄関。現金搬入ルートでもあったため、中庭は建物と障壁で囲まれた閉鎖的な空間となっている。一歩足を踏み入れると、外の喧騒からは隔絶された世界となる。



正面玄関と回廊、2・3階の支柱は、いずれも一本石の花崗岩（北木石）。1階の柱はドリス式、2・3階はコリント式で統一されている。



創建当初、和製ステンドグラスの祖といわれる宇野澤辰雄によって制作された、正面扉上のステンドグラス。



明治の馬車文化の名残りとして保存されている馬の水飲み場。



本館のシンボルであり、辰野金吾の建築で多く見られるドーム。石造の外観の中央に位置し、建物を特徴づけている。ドームは関東大震災で焼失した後、改修された。



建物の全景を俯瞰すると「円」という字に見える。しかし建築当時の日本の通貨は「圓」であり、辰野金吾が意図して「円」にしたのかどうかは永遠の謎なのだそうです。



正面向かって左、西の外堀通り側から見た本館。道を隔てると日本橋川が流れており、建設資材はこの水運を利用して運ばれた。かつてはこちらにも門が設けられていた。

地震大国の西洋建築

通貨価値や金融システムの安定という役割を担う中央銀行として、日本銀行が誕生したのは明治15年（1882年）。その6年後の明治21年に、辰野金吾は日本銀行の設計依頼を受けた。同時に、1年間の欧米の銀行建築調査を命じられる。明治16年より建築家として活動していた辰野は、一時仕事を中断し、アメリカ、イギリス、そしてヨーロッパを巡って銀行や公共建築を視察した後、満を持して設計を行った。

明治23年、地下一階、地上三階の日本銀行本店本館が着工。明治24年、マグニチュード8、死者一万二千人を超える濃尾地震が発生し、辰野はすぐに現地を視察。本館は、厚さ2.6メートルのコンクリート礎盤の上に、建物の内側に煉瓦を積み、外側は石を積む石積煉瓦造という構造とした。

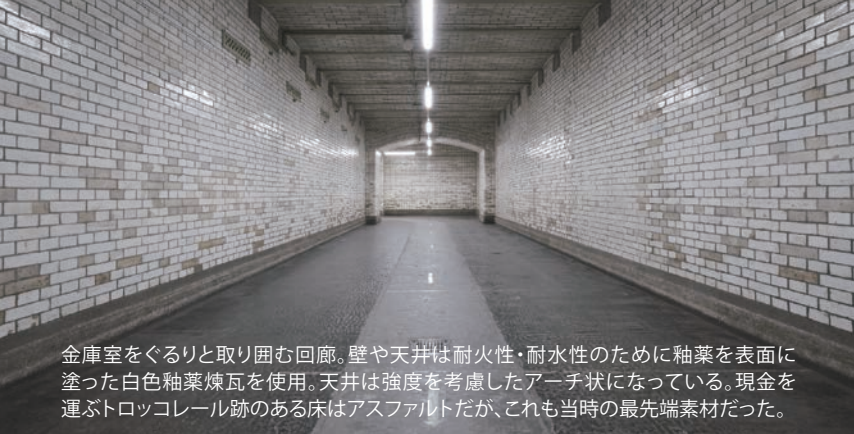
辰野は明治17年帝国大学工科大学教授に着任した当初から、「地震学」という学科を新設するなど、日本独特の問題に着目した建築家

だった。こうした設計方式のおかげで、大正12年の関東大震災においても本館は崩壊を免れた。建物の一部は類焼したが、地下の金庫室は被害を免れ、日本銀行は一営業日も休まずに業務を継続した。震災による火災の修復は、辰野金吾の弟子である長野宇平治に託される。長野は、本館復旧工事に続き、本店増築棟の設計も行うが、「辰野の本館」を踏襲し、調和させることにこだわった。

本館は昭和49年（1974年）に重要文化財に指定された。すでに中央銀行としての機能や業務の多くは増築された2、3号館や新館に移されている。しかし現在も本館はすべての棟と接続され、日本銀行の顔として一般見学者を受け入れ、一部は事務室としても利用されている。



正門のキーストーン「青銅製双獅子額」。彫刻家菊地鑄太郎作。獅子が抱える図柄は、「日」の古い書体で現在の日本銀行券、お札にもデザインされている。



金庫室をぐるりと取り囲む回廊。壁や天井は耐火性・耐水性のために釉薬を表面に塗った白色釉薬煉瓦を使用。天井は強度を考慮したアーチ状になっている。現金を運ぶトロッコレール跡のある床はアスファルトだが、これも当時の最先端素材だった。



金庫の入口となる第二の金庫扉。その先には、最奥部の第三の金庫扉がある。



厚さ90センチ、総重量25トン、開閉には複数の人の手が必要な地下金庫入口の扉。増築に伴い、昭和初期に敷設された。



第三の金庫扉の奥、本館地下の最奥部にある金庫室。いわばお札（銀行券）のシェルターだ。



地下に空気を取り入れる通気孔が設けられている。この通気孔には、万が一の時には、水を金庫に入れて盗難等を防ぐ目的もあったと言われている。

創建時そのままの姿を残す地下金庫

本館の地下金庫は、関東大震災時の火災の影響を受けていない、明治29年創建当初の姿をそのままに

その先に第二の金庫扉がある。金庫室の入口だ。金庫室の周りには、現金を運び込むための回廊があり、かつて使用していたトロッコのレールの痕跡が残されていて、金庫への入口にはターンテーブルの跡もある。壁や天井の煉瓦が白いののは、耐火性・耐水性のために釉薬を表面に塗った白色釉薬煉瓦を使用しているからだ。

回廊をまたいで第二の金庫扉の中に足を踏み入れると、そこはもう金庫の内部だ。現在展示室として使われている左右の空間は、金庫の中というよりは教室ほどの広さの窓のない部屋になっている。そして正面、第三の金庫扉の先にあるのが、最奥部の金庫室だ。125年前から変わることのない、頑強に

とどめている貴重な空間だ。平成16年まで、108年間実際に使用されていた。映画でしか見たことのないような重量感ある第一の金庫扉。それが本館地下金庫への唯一の入口だ。この分厚い扉を抜けると、

守られた奥の中の奥。鍛鉄製の柱と梁で屈強に補強された部屋の壁や天井は、やはり白色釉薬煉瓦。壁には換気設備の通気孔がある。本館の周りには地下階の換気と採光のためにドライエリア（外堀り）が巡らされている。

建築にはそれぞれ目的があり、それが明確で普遍的であればあるほど、後世へと引き継がれる。我が国の中央銀行として、銀行券を発行するとともに、通貨及び金融の調節を行うという日本銀行の目的は、明治も今も変わらない。辰野金吾が全身全霊を込めた日本銀行本店本館は、今も変わらずそこにある。

日本銀行はホームページでもオンラインで日本銀行本店の見学ができる『おうちで、にちぎん』を公開しています。



<https://www.boj.or.jp/announcements/education/ouchi.htm/#p01>



客溜と呼ばれる旧営業場。ここで窓口業務が行われていた。2階まで吹き抜けたガラス天井の上には、関東大震災まで自然光が入るようガラス屋根が設けられていた。

客溜には古典主義様式のさまざまな装飾が施されている。壁の装飾のレリーフは、アカンサス唐草文様などのデザインが施されている。

かつてのやり取りが偲ばれる、客溜の窓口。当時はまだ先駆的だった電灯照明も設置されていた。

